
声色-Remix-

赤城涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声色 - R e m i x -

【Nコード】

N 4 5 6 2 L

【作者名】

赤城涼

【あらすじ】

声の見える高校生の少年がいた。
ある日、ある出来事で同級生の少女と知り合うことになる。
その少女には秘密があり……。

一番初め。（前書き）

初投稿です。

嘘です。

実は前にもこのサイトを利用したことがあったんですが、あんまり使わなかったので先月（四月）に退会したのですが、またここで投稿することにしました。

前に書いた「声色」をリメイク中です。そのため途中で大きな修正があるかもしれません。どうかよろしく願います。

ジャンルは一応学園にしてありますが、微妙なところですね。

一番初め。

彼女の歌声は美しい。それは誰もが知っていることだった。けど、それは儚くも悲しみに包まれた歌声だった。それは僕にしか分からなかった。

僕と同級生の彼女は僕が通っている高校で有名な生徒だ。ほとんど人と友好関係を結ばない僕が言うのだから間違いないだろう。僕なんかよりも数十倍生徒に知られている。それが別に羨ましいわけではない。

何が有名なのかと聞かれたら、主に三つに分けられるとお答えしよう。

一つめは彼女が美人だということだ。すらつとした顔立ちに優しげな黒く輝く瞳。その美しさは百メートル先の人間にも分かり、同年代の女子とは比べ物にならない。と僕は見て感じた。確信は持てない。遠くから見かけただけで顔を間近で拝見したことないし、この先の高校生活で彼女と関わるような機会はないだろうし。当然のことながら男子からは絶大な人気を博している。廊下を歩いているとき、たまに「付き合いてー」とかほざくバ力を見かける。

二つめは彼女が成績優秀だということだ。教室前廊下掲示板に張り出される順位表で彼女の名前を十位よりも下にあつたことがないらしい。それゆえに彼女に質問する生徒も少なくないとか。彼女の説明はとても分かりやすく、彼女から勉強の仕方を教えてもらった人はその後メキメキと順位を上げていったとか、いないとか。そもそも僕のような一般人とは頭のできが違うのだろう。ちなみに僕は良くも悪くもない点数を取り続けているため変動もない。教師が「やっただけ点数は上がる」と言うが、そもそもやる気がないから上がるわけがない。

最後に三つめ、どうやら彼女は病弱らしい。これは本当にただの噂で確証は何もないらしい。何故そのような噂が広まったかという、彼女が入学当初からたびたび病院に行くため早退するかららしい。同じ理由で欠席、遅刻も多いらしい。見たところ具合が悪そうに見えず、数日前授業中に窓からグラウンドを見たら綺麗なフォームで走るいかにも健康そうな彼女を見たことだつてある。所詮噂は噂なのだろう。さらにその噂は拍車がかかって『彼女は幼少の頃から病気がちで体も弱く、入院生活も長かった』とか大げさなものも出てくる始末。

三つトータルすると都市伝説と同じものを感じる。「こんな人間いるんだー」って思ってしまう。

彼女と仲良くなりたいと思ってないわけではない。男子たるもの可愛い女の子とか美人な女の子と仲良くなりたいと思う。だけど、そもそも僕と彼女とは人間として釣り合わないだろう。住む世界が違うと表現すべきか。

ある日、ある出来事があった。

それは僕が彼女と関わる機会となった。

未だに信じられない。彼女と知り合うことになるなんて。きっかけは彼女の歌声だった。

彼女の歌声を聞いたのは学校構内ではない。

ある意味とつても充実した夏休みが終了して一ヶ月経った十月のこと。見事な秋晴れ。暑くもなければ寒くもなく、過ごしやすい日だった。まだ明るい午後五時過ぎ。平日で学校があった日。帰り道。そのときの僕が何を考えながら歩いていたかという仕事の事などを考えていた。

僕はその日、たまたま普段とは違う道を使って帰った。普段の道なら二十分くらいで帰れるのだが、その二倍以上の五十分くらいかけて回り道で帰った。その回り道の道中にはCDショップや大型書

店があるのだが、その日は特別寄る用事もなく、寄る気にもなれなかった。

その日は回り道をしたかった、歩きたかった、考え事がしたかった。考え事をするため回り道をしたのはこれが初めてではない。高校生ともなると悩み事やじつくりと考えたいことが結構あって、ゆつくりと時間をかけて考えたいのだ。

太陽は傾き、空が次第に赤く染まり始め、アカトンボが数匹飛んでいる。

ちょうど校門から足を踏み出して三十分が経過していた。ちょうど足が疲れた頃に密集した住宅街の中に道路で四方が囲まれた公園が見えてきた。水飲み場とベンチが二つほどしかない。遊具が一つもない殺風景な公園なのだ。そんな公園、当然ながら人っ子一人いない。僕が回り道をする際に必ず立ち寄るスポットだ。これほど静かで考え事のしやすい場所はない。あとは自分の部屋だけだろう。公園に入ろうとしたとき赤いペンキで塗られた木製ベンチに座っていた彼女が視界に入った。そしてその場で立ち止まった。

誰もいない公園に一人の少女。

そんな光景に僕は釘付けになった。

先ほどまで考えていたことが一気に吹っ飛んでしまった。考え事をするためにこの場所に来たというのに、考え事が飛んでは意味がない。

彼女の薄墨色の艶やかな髪が小さな風に合わせて揺れると夕陽に照らされて光っている。

前に書いたとおり、僕は彼女を学校で一度もまともに見たことがなかった。そのせいか、初めて間近で見た彼女の横顔がまるで女神のように見えた。女神というとヴィーナスぐらいしか思いつかない僕の軽い脳みそ。そもそも僕は当然のことながら女神を見たことがないので、その姿が美しいのか自体知らない。ただ僕の頭の中に『女神「美」というイメージがあったからそう見えたのだろう。』

彼女は静かにベンチから立ち上がると何か思い詰めた顔をしながら

ら佇んでいる。

そんな姿もとて綺麗だった。夢いものは美しく見えると聞か、
彼女はより一層にそう見えた。

しばらくの間、時間が流れた。

彼女は閉じていた唇をゆっくり開くと。

「――」

一瞬、空気が揺れた。それと同時に時が止まったかと思った。

少女の口から微かでよく通った歌声が僕の耳まで届いてきた。彼女の歌う姿が美しいのは間違えないのだが、それ以上に僕は彼女の歌声に心を打たれた。

前に聞いた覚えのある歌だ。前に聞いたときは日本語の歌詞だった気がするけど、歌の歌詞はどうやら英語のようだ。英語力が皆無の僕にはさっぱりといって意味が分からない。日本語版の歌詞も覚えていないし。

でも何か伝わってきているような気がした。彼女が何かを伝えたのかと思った。

彼女の歌は人の心を動かす。

彼女の歌声は何もない小さな公園全体に響き渡り、草木はそれに共鳴するかのように音をたてて揺れる。その音は決して彼女の声を邪魔せずに調和している。

「綺麗だ」

僕はいつの間にか、そう呟いていた。

彼女が歌い終えるまでそこから動くことができなかった。

その一部始終をつい見入ってしまった。彼女が歌い終えた後にふと我に帰った。本来の目的である考え事が頭の中に還ってきた。

そしてようやく僕は光景の変化に気付くことができた。

彼女の声が美しく清らかな青色だったことに。

朝、雨、黒。（前書き）

二回目の更新です。

朝、雨、黒。

夏休みに学生らしいことを何一つしなかった僕は、もつとも青春という言葉が似合わない高校生なのではないだろうか。まあ、青春をエンジョイしている人も今では珍しいかもしれない。どちらかというとそれでも何もしないよりはいいだろう。僕は宿題さえやらなかった。

夏休みにあれほど機嫌良く燦燦と光を降り注いでいた太陽も、十月になってしまったらその輝きも落ち着いた。ここしばらくは過ごしやすい日が続いていたのだが、一昨日くらいからあいにく雨が降っている。

土砂降り。

秋雨。

長雨。

確か深夜の天気予報でやたら声のトーンが高いお天気お姉さんが「あと二日間くらいは雨が続きそうです」と言っていたような気がする。窓の外で降り続ける雨を見ていたら、小学校の頃に「どうせ落としてくれるのなら雨よりも飴の方がいいです」と神様に願った自分をふと思い出した。現実的に考えたら飴が降るって相当怖い。やっぱり飴は当たると痛いのでそのときの願いの取り下げを今更ながら

願った。そもそも空から飴が落としたら原型は留まっているのだろうか。

だいぶ頭が冴えてきた。

今日の僕は最高にテンションが低い。雨の音が酷くて起きてしまったのもそうだが、それ以上の原因がある。学校という場所に行くことを考えただけで布団から出たくなる。これが噂の引き籠もり症候群というやつなのだろうか。

いつまでも布団に包まっているわけはいかない。

身体を起こすと、まずは枕元に置いてある目覚まし時計を見た。今日は目覚まし時計が鳴る前に起きたようだ。午前七時前なのは分かっている。時計の液晶画面はデジタル表示で六時三十分と表示されている。普段よりも三十分も早く起きてしまったのか。体がだるかったわけだ。

あと三十分間寝ることができる。だけど今さら寝たって再び午前中に起きられる自信がまったくない。皆無である。二度寝の恐ろしさは今まで何回も味わったことがある。ついついもうちょっと寝てしまつと次に起きたときにはもう午後だったなんてことが夏休み明けから何度かあった。

アラーム設定を消してから、ゆっくりと布団から立ち上がった。身体が一気にだるくなるのが分かった。部屋の中は空に雲が覆っているせいかやけに暗く感じた。

二階にある自室を出た僕は階段を下りて、リビングのドアの前まで歩いた。誰もいないはずのリビングルーム。だけど、そこにはこの家の中には普段見かけない人物が立っているのが廊下からガラス越しに窺える。

彼女は東野絵美という。僕の姉のような存在の人だ。彼女が姉のような存在でも、僕と一緒に住んでいるわけではない。彼女は別の家で一人暮らしをしており、僕もまたこの家で一人暮らしをしている。彼女がこの家に来るのなんて本当に久しぶりだ。僕が彼女に会うのも久しぶりのことだった。

リビングのドアを開けると、その音に気付いた絵美さん。僕の姿を見ると、僕に笑顔を見せてきた。微笑ましい笑顔に見えるが、作り笑顔にも見える。

「おはよう。もしかして起こしてしまったかな？」

「いえ、雨の音があまりにも酷すぎて、起きてしまっただけです。おはようございます。こんな朝早くにどうしたんですか？」

「二階の私の部屋にずっと置きっぱなしだった資料や画集を取りに来ただけだよ。それがどうしても今日必要なんだ。今ちようど出て

いくつもりだっただけだね」

「そうだったですか」

僕はいつものようにキッチンに入ると、お湯を沸かし始めた。

「コーヒーでも飲んでいきますか？ インスタントですけど」

「そうだな、もらっていいこう」

僅かに微笑むと、テーブルの椅子に座った。

お湯を沸かしている間にマグカップを用意するとその中にインスタントコーヒーの粉を入れた。

「……どんな理由に見えたんだろう」

「はい？」

「この家に来た理由よ。答えたときの反応がどうも微妙だったから。私の声は違うように見えた？」

「いえ、今までそんな理由で帰ってきたことがなかったから驚いただけです。声はいつも通り怖いぐらい、暖かな淡い赤色ですよ」

絵美さんはいつも僕に対しては暖かな淡い赤色の声で接してくれる。中には青色や黄色の音が微かに見えるが、ほとんどその淡い赤色。暖かな、優しいげな、ほんわかとした声。彼女の外見に似合わない色。

淡い赤色の粒子は、暖かそうに見えるけど怪しげに輝いているようにも見えた。

「そう、それなら良かった」

絵美さんはテーブルの上に置いてあった新聞を広げる。どうやら気を利かせて新聞を取ってきてくれていたらしい。だけでも僕が時間通りに起きていたらいつの間にか新聞がテーブルの上に置いてあってさぞかし驚いていたことだろう。できればもっと考えて行動してほしい。

「実はあまり見かけないからそのうちに様子を見に行こうとも思ってたの。まさか今日こうして会えるとは思ってなかった」

「ご心配おかけしました。僕はこの通り元気ですよ。学校でも一応友達ができました」

そう、高校生になってようやく僕に友達ができた。

それは僕の大きな進歩といっても過言ではない。今まで小学校、中学校で友達が一人もできなかったこの僕に友達ができたのだ。

「そうか、そうか、それは良かった。そうだ。学校といえば、確か美術の授業は取ってないよね。私の弟分だというのに美術を取らないなんて」

「美術は得意でも、好きじゃないですから」

僕はマグカップに入れたコーヒーを彼女の前に置いた。

とても苦そうな、真っ黒の液体。

「ああ、ありがとう。砂糖は入れてないよね？」

「入れてませんよ。だって家に住んでいたころは、毎日ブラックを飲んでいたじゃないですか」

対する僕は冷蔵庫から牛乳を取り出すとコーヒーの中に入れた。

僕はあまりブラックを好まない。どうも僕は苦いのが苦手なようだ。それがまだお子様の味覚をしているのかもしれない。だからコーヒーは眠気覚ましに毎朝牛乳を入れて苦味を薄めてから飲んでいる。

カフェオレを飲みながらほっとするひと時。

学校のことや普段の生活の話、こんな他愛もない会話を彼女としているのが、僕にとって一番安心していられる時間だった。気を使わないで人と接するということがどれだけ素晴らしいことか。

しばらくすると、絵美さんは右手に持っていたマグカップをそつとテーブルの上に置くと立ち上がった。マグカップになみなみと入っていたはずのコーヒーはすでに空になっていて、カップの底にはほんの少し黒い液体が付いているだけだった。

「じゃあそろそろ出ていくことにしようかな。もし何か相談があったらいつでも私のところに訪ねるといいよ。いつでも相談相手になつてあげるから」

絵美さんは床に置いてあった荷物を持った。

「何を改まつてるんですか。僕たち、家族じゃないですか」

絵美さんは軽く微笑むと「そうだね」と一言言って、リビングか

ら退室した。

また一人になってしまった。だけど昔の一人ぼっちとは違う一人ぼっち。今は少なくとも一人、一緒に暮らしていなくても僕には大事な家族がいる。それに大切な友達だっている。だから寂しいという気持ちは生まれなかった。

すっかり時間も経過して、すでにいつも起きている時間になっていた。そろそろ学校に行く準備を始めなくてはならない。

僕はひとまず朝食を取るためにトースターに真っ白な食パンを二枚入れた。カフェオレを飲みながら待っていたが、食パンは指定した時間になっても出てくる気配がない。トースターに入れた三分後に真っ黒けになって飛び出した。

今僕の目の前に黒焦げトーストが二枚ある。まるで先ほどまで絵美さんが飲んでいたブラックコーヒーのような真っ黒な食パンだ。どう考えたって、食べられるものじゃない。

僕は大きなため息を吐いた。

黄色い傘の彼女と、長電話。(前書き)

三回目の更新。最後らへんは遊んだ。

黄色い傘の彼女と、長電話。

男子高校生。

現在の社会的立場。

僕はなるべく友好関係を広げないように心がけていた。人に気をつかうのが大変だからだ。また、人に気をつかうのが苦手というものもある。人の感情が見えるからより一層気をつかうこともなる。そんなことで毎日体力を削っていたら身体と精神が持たない。クラスの人には愛想笑いを浮かべ、なるべく会話が続かないようにし、さつさと席に着く。終わったら教室から出ていきまた始まるころに戻る。教室にいるとしてもそれは友達が話しかけてきたときだけ。

今日も僕は一人で登校していた。単純に数少ない友だちが近くに住んでいないというだけの話。

平日の朝だというのに、人も車もあまり見かけない。同じ方向に向かう人は僕と同じ制服を着た人がほとんど、しかも数は少ない。けっこう発展している町なのかもしれないけど、田舎なのには変わらない。だから仕方がないことなのかもしれない。

天気が悪のままで。まだ大粒の雨が降っている。こんな天気の中で歩きたいという気持ちには、さすがになれない。天気も気分も晴れない秋の日。「はあ」という溜め息も雨音によってかき消される。そんな雨模様。あーあー嫌だなー。

そこでふと考え付いたのは、傘を差しながら歩くというのは意外に高度なことなのかもしれない、ということだ。濡れないように気を付けながら歩いていても、雨傘に溜まった水滴で制服の肩が濡れたり、鞆に水滴が落ちたりする。たまに上半身ばかり気にしていると水たまりを踏んでしまうときがある。そのせいで雨水は靴を貫通して靴下へ。濡れた靴下のあの張り付いた感じは考えるだけで嫌だ。完璧に雨から身を守る人はいるのだろうか。

上からも下からも雨の攻撃。

僕は雨という天気を好きになれない。歩くのも面倒だし、雨が降っている光景を見ているだけで憂鬱になってしまう。

水たまりに踏み込まないように気をつけながら、なるべく早く学校に着くよう、急ぎ足で道路を歩いていた。朝のホームルームまで時間があるが、こんな中をいつまでも歩きたくないという気持ちのほうで断然勝っていた。

段々と体が冷えていく。僕がせつせと歩いていると、ある人物が目に入った。

数十メートルくらいの距離。車線を挟んで向かい側。

同じ学校の女子生徒が黄色い傘を差しながら歩いていた。見覚えのある顔だった。僕は彼女のことを少し知っているが、彼女はおそらく僕のことを知らない。彼女が有名なのがその原因だし、僕が知られていないというのも原因だと思う。

しばらく並行状態で歩いていると、彼女の元には他の女子生徒が駆け寄った。

彼女は笑顔を浮かべるとその生徒のためか、少し歩くペースを遅らせた。対する僕も一緒にペースを落としたり何だかストーカーみたいなのでそのまま前へ進んでいく。女性は男性の視線に敏感だと何かの本に書かれていた気がする。もしかしたら僕の視線にも気づいていたのかもしれない。

まあ、どうでもいい。

「学生の本分は勉強にある」教頭が夏休み明けの全校集会で言っていた。「学校は勉強するためだけの場所ではない」この前担任教師が言っていた。どっちが正しいのだろう。

そんなことを考えながら、一時間目の開始を待っていた。

物思いに耽っている最中に携帯電話がバイブレード状態。

教室を出て、廊下の奥、突き当たりに移動している間にバイブレ

ーダが切れた。誰もいないことを、そして誰も来ないことを確認するところからかけ直した。

「はいもしもし私です」

『私だよ』

「失礼ですが誰ですか？」

「画面に名前が出てるでしょ？」

朝に聞いた声だ。画面を確認した。受話器モードに戻る。

「もうすぐで授業です」

『重々分かってている。だけど私が暇なときが今だったの』

「暇だからといって僕に電話をかけないでください」

『そういう意味じゃないの、用事があるの』

「じゃあ放課後か昼休みにしてくれませんか。僕が暇なときは放課後か昼休みですから」

『それも重々分かってているのよ。だけど今なの、今しかないの』

「どんだけ忙しいんですか」

美術教師の忙しさなど僕は知らない。

『とにかく今なの』

「またのご利用お待ちしております」

電話を切った。教室に戻ろうと足を振り上げると同時にまたバイブレード状態。

「お待ちしますとは言いましたが、今は待ってません」

『まず、その用事を聞いてよ』

「……用事は何ですか？」

『私の、話相手に、なって』

さっきとはうって変わりすぎ。

「完全に僕は遊び相手ですね。あなたはいつでも相談相手になると言っていました、これじゃ反対ですよ」

『遊び相手とかそういうことじゃないの。大事な話があるの』

「あなたの大事はあてにならん」

『……本気で私を怒らせたようね』

「あなたを怒らせたらどうなるのでしょうか？」

『また一緒に住む』

「それは本末転倒だ」

『私だつて寂しいときがあるの』

「男でも作つて慰めてもらつてください」

『そこらの男より弟のほうが魅力的よ』

「背筋が寒いをスルーして凍りました」

『嘘よ』

「安心しました」

『義弟のほうか』

電話を切った。教室に戻ろうと足を振り上げると同時に学内放送が入った。

何年何組何々君、至急美術準備室に来なさい。

空耳にしろつか、僕の名前に聞こえた。

何年何組何々君、至急美術準備室に来なさい。

二回目でようやく僕の名前だと確認した。

職権乱用です、先生。

頼みと質問。見えないもの。(前書き)

四回目の更新でございます。

頼みと質問。見えないもの。

目に見えるものが全てではない。

聞いたことのある台詞だ。まったくといってそのとおりだと僕は思う。

実際、空気、酸素は人間だけでなく地球に生息する生物全てが必要とする、無くてはならない物質だがその実体は人間には見れない人間の声も、人間の感情も物体じゃないわけだし、案外大切なものというのは目に見えないものなのかもしれない。

だけど、そんな大切なものが見えるようになったら、人間はどうなってしまうんだろう。

例えば、感情。皆が感情を見えるようになったら、この世界に嘘はなくなるだろうか。感情が見えれば嘘は丸分かりだし、そもそも嘘を吐く意味もなくなる。良いことのように思える。ただ、それだと隠し事ができなくなる。人間誰でも一つや二つ、誰かに隠していることがあるはずだ。見えるようになったら、隠し事をしていることもばれてしまう。そうになると、人間は自然にコミュニケーションをしなくなる。

大切なものって見えなくてはならないのかもしれない。

。

一時間目の授業が始まったというのに、僕は教室で授業に参加していなかった。

美術科準備室でお茶を飲みながら、ほっとするひととき。目の前には茶菓子里に食べるのも惜しい綺麗な和菓子が置かれている。僕はそれを少し口に運び、お茶を飲んだ。至福のひととき。何かが間違っているような気がする。

「人の楽しみを奪っておいでよくそんなことが言えるね」

不満そうな顔をする絵美さんが本棚の本を整理しながら僕の顔を窺ってきた。

「三時のおやつタイムに楽しもうと思ってたのに」

「あなたは僕の勉強時間を奪ってるんですから、これでおあいこです」

再びお菓子に手を伸ばし、黄色い餡を切り分けるとその片割れを刺して口に運ぶ。普通に美味しい。少し甘過ぎるような気もしたけど、和菓子は少し甘すぎるくらいがちょうどいいのかもしれない。甘ったるさが残ったら、お茶を飲んで和らげる、というより洗い流す。

美術科準備室に来るのはこれが初めてだった。予想通りに部屋は片付かていない。普段から片付ける癖をつけると同棲（？）生活ではあれほと言ったのに、そこらじゅうにキャンパスやら絵の具やらクレパス、美術科ならではの道具が散らかっていて、まるで芸術のジャングル状態だった。「芸術家って皆こんな感じなのかな」と勝手な想像をしたが、そもそも僕の知り合いに絵美さん以外で芸術に精通している人なんていないからよく分からない。

僕がこの部屋に入ってまず言った一言は「片付ける」だった。絵美さんと一緒に住んでいた頃、彼女の散らかしたものを片付けるのは僕の役割であつたが、今では別々に暮らしている。自立してもらわなくては弟分である僕が困るのだ。僕は別に潔癖症というわけではないのだが、これはあまりにもみつともない。他の先生が入ったとき、どんな反応をするのだろうと想像した。これだから彼氏ができないんじゃないか？

あれこれ散らかり放題の部屋の言い訳をする絵美さんを一蹴すると、絵美さんはしょんぼりとして片付け始めた。そんなことがあつて今、絵美さんが片付け終わるまで僕はこうしてお茶を楽しんでいるというわけである。

だいぶ片付いたようだが、元が酷かったのでまだ散らかっているように見える。

「その大事な用とやらを早く言ってください」

「嫌だ。私もお茶するまで言わない」

とか言って僕を教室に帰さない。教師にあるまじき行為である。

授業の三分の二が過ぎた頃、ようやく片付いたようで、絵美さんは自分の分のお茶を入れ始めた。

「疲れたわ」

「普段から片付けないからいけないんです。自業自得です」

「あれはあれで過ごしやすいのよ」

「僕には分らないですね」

お茶をゆつくり啜った。残り僅かで、それでいて既にぬるかっ

僕は絵美さんに頼み、お茶のおかわりを貰った。

二人とも椅子に座るとお茶を飲んだ。

「ほんとは少し片付けてもらおうと思って呼んだんだけどね」

「最低な大人ですね」

「冗談よ」

あまり冗談には聞こえなかったのは僕だけだろうか。

「まさか本当に暇だからってここに呼んだんじゃないでしょうね」

「冗談が通じない男だな、君は。だから女の子にモテないのだよ」

余計なお世話だ。それにあんたもそうだろ。

「最近学校全体が暗いと思わない？」

どうやらそれが本当の用件らしい。学校全体のことを考えてるなんて思わなくて、僕は思わず反応に戸惑ってしまった。なんだかなだでこの人はちゃんと先生やってるんだな。

「そうですね、特に二階クラス廊下前の廊下なんて暗いですね」

「明かりのことじゃないよ」

「蛍光灯換えたほうがいいんじゃないかな」

「あまり気にしたことが無いので分かりませんね」

そんな学校思いの先生に対して素っ気無い返事を返した。冷たいと思われるのも不服なので説明しておく、そんなことを普段から考えて歩いているわけがないだろうということである。学校に来る

のだってあまり好きではないのに、そんなところにまで目がいくわけがない。

「絶対暗くなっただと思うの。前よりも話し声が小さくなったとか、テンションが下がったというか空気が重いというか、とにかくそんな感じ」

「曖昧ですね」

「だって実際曖昧なもの」

「そんな曖昧なものを僕に押し付けてどうなるっていうんですか？」

「君ならどうにかしてくれるかなって思ったの。私のこともそうだったし」

「もう朝のうちに使い果たしてしまいました。もう見えません」

「別にさっきは冗談を言えって言ったんじゃないよ？」

「面倒なことが嫌いなだけです。僕、基本的に人見知りなんで」

「あんなに人思いだった君はどこに行ってしまったんだろうね。あのときの君は本当に格好良かったのに。ちなみに私はそこに惚れたんだよ」

「そんな大胆告白をされても僕はノーとお断りするだけです」

「で、なんとかしてくれるの？　どうなの？」

絵美さんの目がこちらを見つめる。あまり見たことがない真剣な目だった。僕はそんな目から視線を外すと困惑してしまった。

彼女に養われてる身としては、頼みを引き受けたい。けれど、生徒である僕一人が奮闘したところで一体何ができるのだろうか。所詮僕はあまり人と話をしない一般ピーポーであり、できることも少ない。ほんの少し人と違う特徴があるだけだ。

僕は躊躇いながら言う。

「僕には難しいことです」

僕みたいな人間には難しい。

「そう？　私には簡単に思えるけど」

「僕にとっては難しいんです」

「たまには難しいことにもチャレンジしてみたら？」

「原因が分かってても対処法が思いつかないかもしれない」

「そのときは私も協力するよ」

「なんでそんな必死なんですか？」

「だって学校全体が暗いのかって何か嫌じゃない？」

「僕はどっちでもいいですね。むしろ暗いほうが過ごしやすい」

「私は嫌だなー。学校は楽しい場所であるべきだと思うの」

お茶を一口。さっきよりも味気ない気がする。

学校愛というやつだろうか。だけど、絵美さんがこんなに学校好きだったなんて知らなかった。適当に授業しているだけだと思っていたのに。

どうにかしてあげたいという気持ちが芽生え始めた。

できることは少ないかもしれないけど、自分ができることをやってみようか。

そこで僕はふと、ある質問を思いついた。

「絵美さん」

「ん？」

「もし人の感情が見えるようになったら、絵美さんはそれを使って何をしますか」

今まで聞いたことがない質問だ。今更な気もするし、なんで今まで質問しなかっただろうと思う。

そんなことを聞かれるとは思っていない絵美さんは少し固まったが、すぐに笑みを浮かべて言った。

「君が私の頼みを引き受けてくれたら、考えておいてあげる」

一時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

彼女との対面（前書き）

お久しぶりです。

彼女との対面

。

約束したからには、ちゃんと果たそうと思う。

思うけど、どうすればいいかイマイチ分らないでいる僕です。安請け合いましたつもりはないけど、もう断りたくなってきた。そもそも頼まれた内容が抽象的過ぎる。『学校全体が暗くなった』と言われても学校内で常に人間観察してるわけじゃないのでそんなことにいちいち気付けるはずがない。僕の学校での立ち位置は常に教室の隅っこに静かにしている生徒なのだから、人との交流も少ないのだ。そのため、学校の噂やら何やらに遅れてしまうのもはや必然的なのだ、ハハハ。唯一のパイプラインは数少ない友達からだけ。なんと世界が狭きことか。

そんな友達が少ないことに定評がある（誰が定評するのだろうか）僕の隣にはその唯一の友人が誰の席か知らないけど勝手に腰掛けていた。

南野という。

高校という組織に抗っているのか、髪の色は金色である。一見不良のように見えるが、いたって普通の高校生である。髪の毛は地毛らしい。

「一時間目の授業をサボってどこ行ってたんだ？」

チコクの常習犯のため、あの職権乱用呼び出し放送は聞いてなかったらしい。

「美術科準備室だよ。呼び出されたんだ」

「絵美ちゃんに？ またなんで？」

「ある事を頼まれた」

「お前にか？ お前、絵美ちゃんとどういう繋がりがあるわけ？」

「姉弟だよ。ていうか、前にも同じこと話さなかったっけ？」

「うーん、話されたような気がする。だけど、うーん、よく覚えていないなー」

毎度毎度こんな感じである。

どこか抜けている。だけど、今では彼らしい。

「で、そのある事って何事？」

「まるで風紀委員がやる事」

「お前風紀委員じゃないだろ」

「風紀委員はお前だろ金髪少年」

明らかに風紀を乱しているようにしか見えないけど風紀委員。根は真面目だからな。……真面目な奴が遅刻の常習犯なわけがないか。

「しょうがないだろ。俺イギリスのクウォーターなんだから」

「おおー、どうでもいい情報」

この物語には一切関係ない。覚えとく必要もまったくありません。そして結局遅刻ともまったく関係ないね。

「なら風紀委員の俺が手助けしようか？ 一人でやるよりも二人のほうが効率良いだろ」

「頼みたいのは山々なんだよ」

「じゃあ何故頼まない」

「僕自身、それをどう解決すればいいのかよく分からないんだ」

「もしかしたら俺が解決できるかもしれないねーだろ？ 俺を頼れよ！」

「あのさ、最近学校全体の雰囲気が悪くなったらしいんだけど、どうすれば良いと思う？」

「ごめん、分からん」

「頼れつつたろー!!」

「まず、俺には学校の雰囲気とか分からねーし」

相談相手を間違った。

いや、そもそもこの依頼自体がおかしい。普通こんなことに頼むものじゃない。

生徒会か何かに頼めよ！

「力になれなくてすまない」

「いや、こっちこそこんな言って悪かったと思ってる」

南野は立ち上がって僕に席を譲ると、言った。

「また力になれそうなのがあつたら相談しろよ」

「ああ、相談できるようなことならな」

どうすればいいのだろうか。

雰囲気が暗くなった理由を探す必要がある。

だけど、どうやって探せばいいのだろうか。

探す方法が見つからない。目で探ればいいのだろうか。それにも限度がある。いくらなんでも学校内にいる一人一人を見て回るなんて面倒なことはしたくない。

どうすればいいのかな！。

。

その日、僕は遠回りをしたくなった。

家まで二十分の道のりを倍以上の時間、五十分もの時間をかけてどのくらい歩いただろうか。

少し歩き疲れたなあ、と思っていたとき、遊具のない公園にたどり着いた。その公園の端に二人がけの赤いベンチがあつたはず。そこで少し休んでいこうと思っていた。

だけど、そのベンチには珍しく先客がいた。そして僕は何故か公園の入り口付近で立ち止まってしまった。

先客とは同じ高校の制服を着た女子生徒だった。

細い薄黒色の髪の毛が風で微かに揺れている。普段訪ねている公園がまるで違う空間のように見えた。目の前の光景の中で一番存在感がある。そんな存在の突然の登場に戸惑ってしまったため、立ち止まってしまったのかもしれない。

整った顔立ちをした女子生徒を僕はうる覚えながら知っていた。結構有名な生徒だったはずだ。何で有名なのかは以前より南野から

聞いていたのだが - あまりにも熱弁するので半信半疑だったけど -
目の当たりにしてようやく理解した。
彼女に見蕩れてしまった。

これが、彼女との出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4562/>

声色-Remix-

2010年10月8日14時28分発行